

## 【上越教育大学特色G Pの概要】 高田 喜久司（上越教育大学理事兼副学長）

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました高田でございます。特色G Pの概要説明ということでございます。どの資料が一番いいかなと思って探したところ、やはりこれかなというふうに思いますので、皆さんのところに配布の『教職キャリア教育による実践的指導力の育成』、これに基づきまして概要説明をさせていただきます。

採択されたのが平成17年度に採択されたということでございまして、実は先ほど学長から話があったわけですが、1回目もだめでした。2回目もだめということでかなり消沈したというようなところがあったわけですが、なにくそというようなチャレンジ精神でやりまして、3回目のチャレンジで採択されたということでございます。

この特色G Pは実績も評価されるというようなことでございまして、採択された際には実は関係者で祝杯をあげたというようなことがあったわけですが、朝日新聞では小さな大学で祝杯をあげるというような形で新聞に紹介されました。よく覚えているんですが、朝日新聞社の増谷さんという記者でございました。本学の中心は教育実習であるわけですので、それに基づいたものということで通ったということで、本当に悲願達成というような状況でございました。

そこにありますように主題は「教職キャリア教育による実践的指導力の育成」ということでございまして、副題は「分離方式の初等教育実習を核として」という題にしたわけですが、初年度はきつと副題が主題みたいな形になっていたかなというふうに思います。実績もなかったということでだめだったわけですが、2年目に教職キャリアという形を入れて、最終的にはこの教職キャリア教育というものが非常に新鮮な形で受け取られたのではないかなというふうに思います。

本学はちょうど30周年を昨年10月に迎えてまして式典を行ったわけですが、実践的指導力につきましては、そういうような経緯があったわけでございます。

創設の1年目から本学の教育理念としては、高度な専門的力量と教育実践に精通した有能な実践家を育てるということでずっと進んできているわけでございます。

昭和53年に創立されまして、学部定員が160名、大学院定員が300名ということで、初等中等教育教員の養成を目的とした新構想大学という形であったわけでありませ



先ほども学長から話がありましたように、地域のバックアップがなければだめなわけございまして、地域に支えられてきめ細かな指導体制が確立しているということございまして。97カ校の支援を得ているという状況でありました。

歴史を見ますと、平成12年度に大改革を行ったわけですが、これは実践的体験的学びを重視し、体験学習とかボランティア体験等の科目を導入したということございまして、「臨床」と「体験」をキーワードとしたカリキュラムの改革を行ったわけでありませ

その中で、学びクラブというものを平成10年に立ちあげまして、内容を充実させつつ、発展しております。そういうようなことも重要な点でございました。

そして平成17年度には全国で初めての「分離方式による初等教育実習」の導入を図りました。これが副題にあるように、この研究プロジェクトの中心にあたるわけでありませ

そして平成17年には「総合インターンシップ」を導入してきたということでございませ

それでは主題にあります「教職キャリア教育」というのはどういうことなのかということが、その右側に説明がなされているわけでありませ

ります。

それでねらっていることは自己の適性理解と子どもや教育活動の理解、それによって教育を主体的に創造できる教師の育成をねらったわけでございます。

また教育実習を中核にしたカリキュラムはどういうふうな形になっていくかということが2ページの左側にあります。そこにありますように教育実習体系と改革科目の位置づけであります。平成12年度に導入した1年次の「体験学習」、「人間学教育セミナー」、「教職の意義」、それから高校との連携を図る「ブリッジ科目1」、2年次には相互コミュニケーション科目の「表現」。それから実践的人間理解科目、ボランティア体験などといった形で体系的な実習をできるようにしたということがございます。

その中で人間教育学セミナーがずっと現在も続いているんですけども、教職までの道のり、教職をめざして4年間のカリキュラム体系、児童生徒のアンケート調査結果というようなことを入れたり、今求められる実践的指導力とはというようなことについて学ぶ現代教育理論、教育現場のさまざまな問題について教職の意義、教職のガイダンスということによってやってきているわけであり、今年度は教員の資質能力というようなことで必読図書を設けつつ、理想的な教師像というような形で弁論大会をやっております。

もう一つ、12年度改革から重要だったのは体験学習ですね。1年次に必修科目として設けたわけでございます。問題もなかったわけではありませんが、「経験は教育活動創造の原点、源」であるといった観点に立って出発してまいりました。基本コンセプトである身体活動としての学びをとおして教職をめざす上での経験幅の拡大と必要性を自覚させるということで、当時11コースの体験学習が行われておったということでもあります。

そこにありますようにいろいろな体験がありますが、そのひとつ、炭焼き体験は、里山を舞台に窯の穴掘り、空焚き、煙突や焚き口作り、原木の切り出し裁断、原木入れ、盛り土作業、火入れと火の管理、火止めと作業、これを終日続けます。大半の学生は火入れまで行って帰校しますが、学生有志は徹夜で火の管理にあたりました。焼き上がった炭や木酢は学生たちに提供されます。里山の手入れと伐採低木の有効利用という総合的な学習の時間のプログラムであるという炭焼き体験とか、雑魚とり体験とか、11の基礎的な体験をさせようということ

あります。

「現代の若者は」と言われるわけでありませけれども、学生たちは極めてチャレンジ心、挑戦心やたくましさや内蔵させている。それを引き出す機会を与えられてこなかっただけです。学生たちは「山の学校に赴任したらぜひ子どもたちと取り組みたい」と、体験を通して夢を広げています。この体験学習が中核になった教育実習という形になってきているということでございます。

そのほか「学びクラブ」、これもあとで発表があるかと思いますが、学生自身が企画、準備、運営する自主的な活動で、年7回、終日子どもと触れ合う活動をやっているということで、夏には2泊3日の宿泊体験も行って、学生180人、子どもも300人という参加がございます。そこで子どもとの関わり方を学ぶことで教職キャリアの重要な位置を占めているわけでありませ。

さて、副題の分離方式の教育実習ということですが、これは今までの実習の反省から実習校に丸投げしていた教育実習を変革しました。実習期間中を指導案作りで明け暮れるような実態、これらを打破するため、やっぱりマニュアル的な教師ではなく、「教育活動が創造できる教師の養成」ということで、教育現場の校長先生や校長会の先生方の発案によりまして、2年間考えた中で分離方式というものが提案されたわけでございます。

5月の末に観察実習を行う。それに基づいて9月には本実習という形で、その間研究期間を設けているわけがあります。この観察実習と本実習、これを分離して1週間と3週間というふうに分離して行っていく。こういうことでございます。

4ヵ月間ほどですけれども研究期間というものを設けて、ここをなまけていると本実習がうまくいかないわけでございます。分けたことに意味があるのではなくて、むしろ研究期間をどう過ごすかということが重要になってきているのであります。そういう分離方式を実施して6年になりますが、着々と成果が上がっているというアンケートも出ております。

そういう中でいろいろな支援体制というものがありますが、実習を支えるというので教育実地研究2、授業基礎研究で、小学校で使う漢字や筆順のテストを行う。それに合格しないと教育実習の現場に出さない。例えばの例としてそういうようなものを入れております。それから教育現場の先生方を3年間、常任で起用した特任の先

生方から、個別指導や指導案等のことについて指導してもらおうという形で進めてきております。

そして4年次生には、総合インターンシップを導入しています。

今申し上げたようなことを端的に申し上げれば8ページの下のような図になっているということですね。つまり真ん中に教職キャリアというものを教育していくということで、1年次生の自己の適性と課題の自覚、それから経験知を拡大する必要性の自覚、教職への確かな決意をここで涵養していくというようなこと、そのために体験学習と人間教育学セミナー、学びクラブもごさいます。

2年次は経験知と学習知の統合を図って教職専門科目群でということをごさいます。3年次では経験知、学習知と教育実践の統合ということで、教科専門科目群、教科指導法というようなところ、これを重点的に学ぶ。そして4年次に入って教科専門の必要性を自覚して卒業研究を行って知の総合化を図っていくという教職キャリアの筋道、これに合った形で特色あるカリキュラムを配置

し、さらに教育実習もそれに見合う形でやってきております。

そして最近は到達目標という質保証に関わって、スタンダードの作成によって、さらに変容を遂げているということをごさいます。

この後のことにつきましては、釜田先生が「上越教育大学スタンダード」と、それから「教育実習ルーブリック」をキーワードにしてお話いただけると思っておりますし、「ジョイント授業」、「教職キャリアファイル」、「教職実践演習」の手法というような形で充実、発展しているとお上げられるかなと思います。

我々はさまざまな改革を進めてきてはいますが、4年間という限られた時間の中での教員養成です。学生も現実の教育もめまぐるしく変化してきております。決して現状に満足することなく、上越教育大学は全国の教員養成モデル大学をめざしてこれからも最善を尽くしていく所存です。これを申し上げて説明に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。